

研究例会報告

(第 389 回)

テーマ：高砂市立図書館と図書館名誉館長事業の7年

間：市民協働・大学連携・デジタルアーカイブ構築

発表者：橘 安代氏（高砂市立図書館長）

四方 亮輔氏（高砂市生涯学習課課長）

山下 香氏（甲南女子大学文学部
メディア表現学科准教授）

日時：2023年10月6日（金）19:30～21:00

会場：大阪市立総合生涯学習センター第4研修室

参加者：10名

2016年2月にリニューアルオープンした高砂市立図書館で始まった図書館名誉館長事業の7年間について、行政・指定管理者・大学の3者の立場から紹介・報告を行った。

まず、高砂市の四方生涯学習課長から、高砂市と図書館の紹介を行い、図書館名誉館長事業の現在の概要を説明した。村上裕道氏の就任とともに、図書館名誉館長講座は2017年度から始まり、6年が過ぎた現在もテーマや講師を変えながら継続されていることや、2018年度から始まった「HOME TOWNゼミ」には「高砂市史ゼミ」と「映像ゼミ」の2種類のゼミがあること、さらに2021年度には新たに「クリエイティブタウンゼミ」が甲南女子大学の山下ゼミと協力して活動するゼミとして加わったため、2023年度は3つのゼミが活動中であることを紹介した。

特に、図書館名誉館長が事業を通してどのように人を発掘し、ゼミでの活動がいかにかに人材の育成・活躍の場となっているのか、どのようにして新たな人を巻き込む仕組みになりえたのかといった点について、高砂市史ゼミ生が製作した郷土資料や映像ゼミ生が製作した「たかさご八景」シリーズの映像など、事例を交えながら説明した。

次いで、橘図書館長（指定管理者）から、図書館内部からの視点として、指定管理者と市民との協働、館長としての3年間、指定管理者の立場・観点から自分たち職員の変化、勉強会・講座・ゼミへの参加を中心に報告した。図書館サービスの概要としては、特徴的、主なものを紹介し、来館・貸出などの統計数値の分析・考察を説明した。名誉館長事業を通して生まれた職員

の変化について「高砂を知る」「ヒトを知る」「要望を知る」に区分し、報告を行った。高砂を知るために、図書館からまちのフィールドで今のまちを学び、資料や知識と結びつけることで職員のレファレンス力が向上した。ヒトを知るために、講座・ゼミに職員が参加して、文化財でいうところの1次資料を集めている市民やゼミに関わることで、生の情報を得ることやその意味や価値を学ぶことができた。要望を知るために、新しいイベントを市民と構築し、市民が考える本と親子を結びつける今までやったことのない企画作りをやってみた成果として、職員の成長・市民の図書館への関心の高まりが生まれた。

続いて、甲南女子大学山下准教授が、甲南女子大学のメディア表現学科の学生が高砂市立図書館の名誉館長事業の一つである「クリエイティブタウンゼミ」に参加し、名誉館長講座に参加する市民有志と共に地域資源の発信を目的とした、まちあるきツアーの企画・実施について活動紹介した。

さらに、市民と学生との協働を通して、両者の主体性が発揮するプロセスを、ユーリア・エンゲストロームの活動システムモデル²⁾を用いて説明した。具体的には、市民は自らが発掘した情報を活用して説明パネルを作るなど、積極的に活動に参画するようになり、学生は与えられた課題に対して、教員の提案を越えて、独自のアイデアを提案し、実現するに至った。現在も、クリエイティブタウンゼミでの経験を通じて、市民と学生は互いに影響を与え合いながら、地域社会に貢献し、共感を呼ぶ発信方法を追求している。

高砂市の四方生涯学習課長は、行政の視点から、高砂市における指定管理者と行政の関係や高砂市立図書館の将来、デジタル資料アーカイブについて説明した。

高砂市では、現在、図書館の指定管理者担当者は市の直営時の旧図書館に勤務していた司書職員が継続して担当しており、図書館名誉館長事業も担当しているため、日ごろからよく図書館に行き来しており、指定管理者と協議や調整を盛んに行うことができている。また、以前は図書館の指定管理者側の職員が毎年異動や離職が多かったため、せっかく育成してもサービスの質を維持できなかった。しかし、職員の異動が極力少なくなるよう指定管理者と協議し、継続して同じ職員が図書館サービスの経験を積んでサービスの

質が向上するように現在は取り組めるようになった。それだけでなく、指定管理者側も図書館名誉館長事業の影響を受けて、郷土資料の職員研修を始めるだけではなく、図書館から、職員がまちに飛び出して市の歴史を学び始めている。

今後、地方の図書館としてこれからも生き残るために、高砂市では、「HOME TOWN ゼミ」に参加している市民が紙の冊子や映像作品など郷土資料の製作を始めており、このような取り組みを行う市民が現れたのは、図書館名誉館長事業を実施する際に、参加者から人を発掘し、ゼミでの活動を通して育成し、場合によっては講座のゲスト講師へ抜擢して活躍の場を提供した結果であると考ええる。

高砂市では、図書館で市民に対する社会教育が醸成され始めており、これらの活動によって、デジタル資料アーカイブの構築も進んでおり、特別な予算を用意しなくても他市においても始められる、これから目指すべき図書館の姿になるのではないかと考える。さらに、新しく進めている大学と図書館の連携では、村上図書館名誉館長が考える「教育のキャッチボール」を市民と学生と教授の関連図をもとに説明した。

最後に、橘図書館長がこれからの高砂市立図書館は、「挑戦し続ける図書館」でありたいと抱負を述べ、村上氏が提唱する「市民にとって図書館が知的生産の基地、拠点」となるために挑戦を続けていくとまとめた。

(記録文責 橘 安代 高砂市立図書館長
四方 亮輔 高砂市生涯学習課課長
山下 香 甲南女子大学文学部
メディア表現学科准教授)

注)

人間の諸活動を学習という視点で捉えるエンゲストロームは、「拡張的学習」理論 (Engeström, 1987) において、自身の活動目的を自ら問い直すことで矛盾に気づくことが学習の拡張には必須であり、拡張の過程においては、活動を構成する諸要素の変化がみられることを「活動システムモデル」を用いて説明する。

参考

高砂市立図書館

<https://takasago-lib.jp/>

高砂市立図書館名誉館長講座

<https://www.city.takasago.lg.jp/soshikikarasagasu/shogaigakushuka/shogaigakushu/2431.html>

デジタル郷土たかさご

<https://adeac.jp/takasago-lib/top/>